

関心・意欲・態度を指導・評価する。

算数科の学力を「過程の学力」と「結果の学力」の両面からとらえ、総合的に評価することが求められる。ここでは、前者の過程の学力ととらえることのできる「関心・意欲・態度」の指導と評価について述べる。

1 指導について

「もっと簡単で便利な考え方はないの?」「本当にそれが正しいといえるの?」「いつでも使える方法なの?」「もっと早くできないの?」…等と、簡潔・明瞭・的確な表現・処理方法に向けた観点(合理性)で助言を与え続けることが、指導になると考える。そして、この指導が前提となり、評価することが可能になるのである。

2 評価について

簡潔・明瞭・的確な表現・処理方法に向けた姿に対する評価である。つまり、合理性に向けた主体的な追求(思考・言動等)をタイムリーにとらえる必要がある。主として、授業中の評価となるため、簡便性、蓄積性、継続性、指導性、数値化…等の要素が大切になってくる。

【「関心・意欲・態度」の評価の準備・ポイント】

- ① 事前に、本時に表出させたい関心・意欲・態度の姿を具体的に明確にしておく。
(例: 数や場面を変化させて、合理性・一般性を証明しようとしている姿等)
- ② 理想とする関心・意欲・態度の具体的な姿を表出させやすい活動を保障する。
(例: 方法や手段を子どもに任せる。多様な解決方法が存在する問題を設定する等)
- ③ 活動過程で表出した具体的な関心・意欲・態度の姿を学習集団全員に紹介する。この活動が指導とともに評価となる。(そう考えれば良いのか…という気付きの連続)
そして、その姿に対してタイムリーにポイントを与える。その際、子ども自身がポイントを記録することで、喜びを実感し、さらなる意欲(算数の見方や考え方)を高めていくことにつながる。この方法は、授業中の教師の仕事の煩雑さを軽減させるものともなる。
<「簡単な方法を見つけようとしているね。1点入れて。」「数を変えて、いつでも使えるかどうかを試しているのだね。1点」「同じ方法で、未解決の問題に挑戦しているのだね。凄いね。2点」等々>
- ④ 上述の③の方法は、簡便性・継続性・指導性等の要素が成立するものである。このような授業を毎時間積み重ね、2か月間、或いは1学期間のポイントを集計させれば、評価が可能となる。学級集団の平均点を求め、散らばりを分析すれば、A・B・Cの評価となる。

<毎時間、ポイントを記録していくカード例>

ほくの・わたしの 算数の力		年 組 番 名前 []
ア: 関心・意欲・態度	もっと簡単で便利な方法は? いつでも使える方法は?…と、自分で工夫しようとする姿	合計
	正正正正正正正正・・・	106 — 94
イ: 数学的思考	正正正・・・	

評価の4観点をアイウエと記号化しておくが良い。授業中に「ウに1点」と簡潔に伝えることができる。

本人の記録だけでなく、ペアでの記録も取り入れると、正確性が高まる。算数の見方や考え方の指導が充実する。

分子が本人、分母が学級の平均点である。平均点を中心に、得点の散らばりを分析し、ABCの評価を与える。

